

# Chaucerの*The Second Nun's Tale* における聖女セシリア

柴 田 竹 夫

## I

チャーサー (Geoffrey Chaucer, 1340? – 1400) の *The Second Nun's Tale* (「第二の修道女の話」) (以下 *SNT*<sup>(1)</sup> と記) は, *The Canterbury Tales* (『カンタベリ物語』) の中の一話, カンタベリ巡礼者の一人 *The Second Nun* (以下 *SN* と記) が語る 3 世紀のローマの聖女セシリア (カエキリア) (St. Cecilia) の殉教 (martyrdom) にまつわる「聖人伝」である。制作年は 1386–7 年以前, 1373 年以降と推定されている。<sup>(2)</sup>

語り手 *SN* は *SNT* の前口上において, 日常生活で「怠惰」 (*Ydelnesse*) (2) にならず聖人伝から聖女セシリアの輝かしい一生と殉教の話を「勤勉」 (*feithful bisynesse*) (24) に翻訳することをまず述べる。次いで聖母マリアへの祈願とセシリアの名前の意味解釈の後, 聖女セシリアの殉教の話を語り始めるが, *SNT* における聖女セシリアは, 語り手 *SN* の言うまさに「勤勉」にキリストの教えを身をもって実践し, 多くの異教徒をキリスト教に改宗させた後殉教する。

本稿においては, *SNT* における殉教の聖女セシリアの活動の姿を追って *SNT* の意味を検討したい。

## II

聖女セシリアは殉教による死を迎えるまで多くの人々に対し異教の信仰

を取り除き、キリスト教に改宗させる。その改宗には天と地、聖と俗を結ぶ様々な仕掛けが施されている。美しき乙女セシリアによる改宗を、彼女の若き夫ヴァレリアン (Valerian)、彼の弟ティブルス (Tiburce)、そして長官アルマキウス (Almachius) 付の役人マクシムス (Maximus) その他の人々の順に検討する。

まずヴァレリアンからであるが、純潔 (童貞) のセシリアは、ヴァレリアンとの結婚の夜、裏切らないように彼に確かめてから次の様な秘密を打ち明ける。一人の天使 (an aungel) (152) が彼女を大きな愛で守護し、彼女の身も心も守っていて、彼女の身体に触れても、卑しい気持ちで愛しても (156) ヴァレリアンはすぐさま死ぬことになるが、清らかな愛情で (inclene love) (159) 彼女を守るならば、彼の純潔さ (clennesse) (160) ゆえに天使はセシリア同様彼を愛し、その喜びと輝きを彼に示すという。神の至福についてのセシリアの守護天使の秘密をヴァレリアンは知って、神のみ心のままに導かれて、セシリアに、もし彼女の言うことを彼に信じさせようというのならば、その天使を見せるようにと言う。その天使が本当の天使であるならば、彼女の望み通りにするが、もしそれが愛人であるならば、二人共剣で殺すと答える。現世にあって「視覚」という感覚のみを通じて、天使という通常は不可視のものの存在を確かめようとする彼の態度は、地上に生きる人間の取る一つの定まった型と言える。

ヴァレリアンの反応に対しセシリアは即座にこう答える。彼が望むなら天使を見せよう、そしてキリストを信じ洗礼を受けるようにと。そこでヴァレリアンは聖者の墓地 (カタコンベ) に隠れ潜む教皇聖ウルバン (St. Urban) を見つけ出し、セシリアの言葉を伝える。すると聖ウルバンは涙を流す。

Urban for joye his handes gan up holde.

The teeris from his eyen leet he falle.<sup>(3)</sup> (189—90)

人前はばからぬウルバンの喜びの涙は、天国に対する憧憬の涙である<sup>(4)</sup>。

このウルバンの涙の「身振り」は、彼がいかにセシリアの働きとヴァレリアンの改宗に神の恩寵を看て取ったかを端的に表している。

その時ウルバンはこう言う。

“Almyghty Lord, O Jhesu Crist,” guod he,

“Sower of chaast conseil, hierde of us alle,

The fruyt of thilke seed of chastitee

That thou hast sowe in Cecile, taak to thee !

Lo, lyk a bisy bee, withouten gile,

Thee serveth ay thyn owene thral Cecile.

“For thilke spouse that she took but now

Ful lyk a fiers leoun, she sendeth heere,

As meke as evere was any lomb, to yow !” (191—199)

ウルバンは、ヴァレリアンがセシリアのうちにキリストが蒔かれた淑徳の種子の果実（193—4）であると即座に看て取る。ウルバンは又、セシリアを「蜜蜂」にたとえ、その活動性を諳えている（lyk a bisy bee）（195）。セシリアが神の奴隸（thral）（196）として勤勉に神に伝える様について、語り手SNの前口上におけるセシリアの名前の意味解釈（85—119）において、語りSNは、セシリアのことを良き働きにおいて「たゆまず」（bisy）（116）と言うし、勤勉に（bisily）（342）説教する（『黄金伝説』<sup>(5)</sup>に“bisy”の意味の言葉はない）と言う。この“lyk a bisy bee”は一つのことわざ表現で<sup>(6)</sup>、決まり文句としてあった。本稿後半でより詳しく検討するが、セシリアは「蜜蜂のごとく」勤勉に働き、死後彼女の家が「聖女セシリア教会」となることを考えると、「蜜蜂」は、セシリアの「活動性」を象徴するものであると言える。また3世紀前半に活躍した教父オリゲネスが「蜜蜂の共同体のなかにキリスト教徒の共同体（教会）を象徴的に見て以来、この観念はキリスト教神学で定着する」<sup>(7)</sup>ことからもそう言える。キリストの教えを広めるのに活動的なセシリアの、キリストによる靈感を受けた忠告と彼女の不変

の純潔が、ヴァレリアンというキリスト教への改宗者を産み出したのである。

聖ウルバンのヴァレリアンへのこの言葉と共に、白い衣を着た一人の老人（201）が金文字で書かれた一冊の書物を手にヴァレリアンの前に出現する。それを見てヴァレリアンは倒れる。

Valerian as deed fil doun for drede

Whan he hym saugh, and he up hente hym tho,<sup>(8)</sup> (204–5)

セシリアの働きによりヴァレリアンが、柔和なる小羊のごとくキリストのもとに従順に来たるとの彼に向けた聖ウルバンの言葉を聞くやいなや、この老人は姿を現したわけで、その姿を見た時の恐れ（drede）（204）は、神への畏敬（awe）に通じるものである。ヴァレリアンの前に姿を現したこの老人は実際聖パウロ（St. Paul）と解釈されており、老人の手にした書物には、

“O Lord, o feith, o god, withouten mo,

O Cristendom, and Fader of alle also,

Aboven alle and over alle everywhere.” (207–9)

と書かれており、この言葉は聖パウロの言葉『エフェソ人への手紙』第4章5,6節にある次の言葉、

主は一つ、信仰は一つ、洗礼は一つ、神は一つで、すべてのものの父であり、すべてのものの上であり、すべてのものの上にはたらき、すべてのものの内におられる。

と、言わんとするところは同じである。老人がヴァレリアンにこの言葉を信じるかどうかを問い、彼が「信仰告白」をすると老人の姿は消える。聖ウルバンはその場でヴァレリアンに「洗礼」を施す（cristned）（217）（Cf. 171, 299, 352, 380）。この様にしてヴァレリアンは神の恩寵を受けて改宗し、信仰告白をし、セシリアの言う通りキリストを信じ、洗礼を受けるわ

けである。ヴァレリアンの「倒れる」という身振りは、つまりヴァレリアンに対する聖ウルバンの言葉と老人の出現による畏敬に通じる念の現れであり、またヴァレリアンの改宗は彼の自発によるものではなく、神の恩寵に基づくセシリアの勤勉によるものであることがわかる。

洗礼を受けた後ヴァレリアンは家に帰ると、彼の部屋にセシリアが天使と立っているのを見る。この天使は、手に薔薇と百合の2つの花冠 (of roses and of lillie / Coronas two) (220-1) を持つ。天使は、まずセシリアにその一つを、次にヴァレリアンに他の一つを与えてから告知する。天国 (paradys) (227) から持ってきたこれらの花冠を清き身と汚れなき心をもって (225) 守るべしと。萎れもしないし、芳香 (soote savour) (229) を失うこともないこれらの2つの花冠とは、薔薇が「殉教」を、百合が「純潔」を象徴する。天使が2つの花冠を授けるという身振り (220-4) は、儀式的 (ceremonial)<sup>(9)</sup> なものであり、従ってセシリアとヴァレリアンの結婚は、現世における人間の結婚であると同時に身も心も清らかな愛に包まれた天上の結婚をも暗示している。更にセシリアの結婚において、彼女の忠告は、ヴァレリアンをしてキリスト教徒の共同体の一員としたわけで、セシリアは、この共同体の構成員 (信徒) を増やすことを、身を捧げて、現世において実現していったわけである。

天使は更にこれら2つの花冠について言う。もし清らかであって (chaast) (231)、恥辱 (vileynye) (231) を憎むのでなければ、その眼には冠は見えないと。つまりセシリアもヴァレリアンも清らかであって、恥辱を憎む存在なのである。

天使はヴァレリアンに言う。速やかにセシリアの良き忠告 (good conseil) (233) (Cf. chaast conseil, 192) を受け入れたから彼の望むところを適えようと。ヴァレリアンはこう答える。彼の愛する弟にも彼同様「真理」を知る恵み (grace / To knowe the trouthe) (237-8) を与えて下さいと。

この様にヴァレリアンは、セシリアとの結婚と彼女の忠告を受け入れることによってキリスト教に改宗し<sup>(10)</sup>、キリストを信じ、洗礼を受けるという

キリスト教の「真理」を知る神の恩寵を与えられたわけである。

### Ⅲ

次にティブルスにみる聖女セシリアによる改宗について考察する。ヴァレリアンは弟ティブルスにも真理を知る恵みを与えるよう天使に願い、神はそれを適えられる。

The angel seyde, “God liketh thy requeste,  
And bothe with the palm of martirdom  
Ye shullen come unto his blisful feste.” (239—41)

ヴァレリアンとティブルスの二人を殉教の棕櫚 (the palm of martirdom) (240) をつけて神の恵みあふれる「祝宴」に来させようと言う天使の言葉をヴァレリアンが聞くと、そこにティブルスがやって来る。彼は花冠の薔薇と百合の放つ、季節はずれの「芳香」(savour)<sup>(11)</sup> (243) をかいだ時、心の内で不思議に思い始める。しかもその香りは彼の心の奥深く染み込み、彼を別の人間に変えてしまう。

The sweete smel that in myn herte I fynde  
Hath chaunged me al in another kynde. (251—2)

その芳香は聖なる芳香である。ヴァレリアンは、セシリアに天使を見せられた後彼女の忠告を受け入れて改宗し、新しい人間に生まれ変わったわけであるが、弟ティブルスは、聖なる芳香を受けた後兄の忠告を受け入れて改宗することになる。

セシリアに代ってヴァレリアンは、愛する弟を改宗させようとしてこう言う。

Valerian seyde: “Two corones han we,  
Snow white and rose reed, that shynen cleere,  
Which that thyne eyen han no myght to see;

And as thou smellest hem thurgh my preyere,  
 So shaltow seen hem, leeve brother deere,  
 If it so be thou wolt, withouten slouthe,  
 Bileve aright and knowen verray trouthe.” (253–59)

ティブルスがもし怠ることなく (withouten slouthe) (258) 正しく信じ、「真理」(verray trouthe) (259) を知るならば、今はティブルスには見えない2つの花冠が、目に視えるようになるわけである。ヴァレリアンの言葉をすぐには信じられないティブルスに対し、彼は、もし偶像 (ydoles) (269) を棄て、身を清らかにする (be clene) (269) ならば、自分に真理を教えてくれた神の天使 (The aungel of god) (267) に会わせようと言う。このヴァレリアンとティブルスの1.253から1.269にわたる対話の中で、「真理」を表す言葉は4回使われ (259, 261, 264, 267) (Cf. 238, 291), そのうち1.259と1.267の“trouthe”は、『黄金伝説』にはこれに該当する言葉はない。つまりここでチャーサーは、“trouthe”の強調をしているわけで、異教徒であってもヴァレリアンは改宗して神の「真理」を知ることができるようになることをチャーサーの付加は主張している。

語り手は4世紀のミラノの司教聖アンブロウズ<sup>(12)</sup> (アンブロシウス) (St. Ambrose) (this noble doctour deere) (272) の権威を持ち出して、これら2つの花冠の奇跡 (miracle) (270) をこう説明する。

“The palm of martirdom for to receyve,  
 Sainte Cecile, fulfild of Goddes yifte,  
 The world and eek hire chambre gan she weyve;  
 Witnessse Tyburces and [Valerians] shrifte,  
 To whiche God of his bountee wolde shifte  
 Corones two of floures wel smellynge,  
 And made his angel hem the corones brynge.

“The mayde hath broght thise men to blisse above;

The world hath wist what it is worth, certeyn,  
Devocioun of chastitee to love.” (274—83)

聖女セシリアの受けた殉教の棕櫚 (274) とは、天使がヴァレリアンとティブルスの2人にも授けた神の恵みあふれる「祝宴」(241)に参加するしるしであり、これら3人は、地上で殉教死することによって、天上で勝利のしるしの棕櫚を持って、「神の賜」(Goddes yifte) (275)に満たされることになる。信仰告白 (shrifte) (277)をしたヴァレリアンとティブルスのもとに、神は天使に2つの花冠を運ばせになり、セシリアが天上の幸福 (blisse avobe) (281)へと彼らを導く。「キリストへの純潔の献身」(Devocioun of chastitee to love) (283)がいかに価値あるものであるかを、神は、ご自分のしるしとして行なわれる自然の力を越えた出来事である「花冠」によって示されたわけである。これが薔薇と百合の「花冠」の奇跡である。

次いでセシリアはティブルスに対しすべての空しいもの (a thyng in veyn) (285)を捨てるように申し渡す。するとティブルスは、“Whoso that troweth nat this, a beest he is” (288)と言って、彼女の言葉の「真理」(trouthe) (291)に目覚めたことを彼女に告白する。その際、喜びに満ちた彼女は、次の様な静穏 (tranquility)の身振り<sup>(13)</sup>(魂の美しさを表す)を示して、ティブルスの改宗を認める。“And she gan kisse his brest, that herde this” (290)。至福の美しき乙女セシリア (this blisful faire mayde deere) (293)は、この日偶像 (ydoles) (298)を蔑むティブルスを彼女の親族 (myn allye) (292, 297)とする。セシリアは、ティブルスに対して兄と共に行き、洗礼を受け (baptise) (299)、身を清らかに (clene)すれば、兄の言った天使を視ることができると告げる。先にヴァレリアンがティブルスに偶像を捨て、身を清らかにする (be clene) (269)ならば、天使に会わせようと告げたのと同じく、キリストへの「純潔の献身」(283)への導きである。

セシリアの導きの後、ヴァレリアンが、弟ティブルスを聖ウルバンのもとに連れて行こうとすると、弟は大きな恐れを示す。つまりウルバンが発



見されると火で焼かれ (313), 彼自身も道連れにされて (315), 命を失う恐れがあるという現世の人間として当然抱く生命に対する克服し難い迫害の恐れを告白する。この生命に対する現世の見方に対してセシリアは、天<sup>上</sup>的視点を自信をもって (boldely) (319) 説く。

“Men myghten dredren wel and skilfully  
This lyf to lese, myn owene deere brother,  
If this were lyvyng oonly and noon oother.

“But ther is bettre lif in oother place,  
That nevere shal be lost, ne drede thee noght,  
Which Goddes Sone us tolde thurgh his grace.  
That Fadres Sone hath alle thyng ywroght,  
And al that wroght is with a skilful thoght;  
The Goost, that fro the fader gan procede,  
Hath sowled hem, withouten any drede.

“By word and by myracle heigh Goddes Sone,  
Whan he was in this world, declared heere  
That ther was oother lyf ther men may wone.” (320—32)

セシリアは、死の恐れに対し理解を示しながら、神の子キリストが示された失われることのないより良き生命が他の場所にあること、神に発する聖霊が人に魂を授けたこと、そしてキリストがこの世におられた時、人には別の生命があることを「言葉」と「奇跡」で (By word and by myracle) (330) 示されたことをティブルスに説く。更に神 (o beyng of divinitee) (340) における3つのペルソナのことを証言し、キリストの到来と受難、そしてキリストが罪と苦難 (synne and cares colde) (347) に縛られた人類に「赦し」(remissioun)<sup>(14)</sup> (346) を与えるためにこの世に留まられたことを「勤勉に」(bisily) (342) 説いて聞かせる。キリストが永遠の生命を「言

葉」と「奇跡」で示されたごとく、セシリアも彼女の「言葉」と神による「奇跡」でもって、ヴァレリアン同様ティブルスを説き伏せ、キリスト教信仰の道へと導く。

この後ティブルスはヴァレリアンと共に教皇ウルバンのもとに行く。ウルバンは神に感謝し、かつてヴァレリアンにしたのと同じく (217)、喜んでティブルスにも洗礼を施し (cristned) (352)、完全な教えを授け、彼を「神の騎士」(Goddes knyght) (353) とする。これでティブルスは毎日天使 (The aungel of God) (356) を視るという恩寵 (grace) (354) を得、更に神へのあらゆる祈りはただちに適えられることになる。先にセシリアがティブルスに言った言葉がここに実現したわけである。

この二人を「神の騎士」としたセシリアは、確固たる顔つき (a fulstedefast cheere) (382) でこう言う。

“Now, Cristes owene knyghtes leeve and deere,  
Cast alle away the werkes of derknesse,  
And armeth yow in armure of brightnesse.

“Ye ham for sothe ydoon a greet bataille,  
Youre cours is doon, youre feith han ye conserved.  
Gooth to the corone of lif that may nat faille;  
The rightful Juge, which that ye han served,  
Shal yeve it yow, as ye han it deserved.” (383—90)

ヴァレリアンとティブルスが「神の騎士」(383) として大きな戦い<sup>(15)</sup> (386) をなした、つまりマクシムスや死刑執行人たちを改宗させ、アルマキウスに屈服することなく固く信仰を守り通し、走るべき道を走り通したとセシリアは宣言する。

光の甲<sup>よかい</sup><sup>(16)</sup> (armure of brightnesse) (385) を着ける神の騎士、ヴァレリアンとティブルスの二人は、正しき裁判官 (The rightful Juge) (389) であるキリストから萎れることのない生命の冠 (388)、決して失なわれることの

ない天国のより良き生命 (323) を授けられる殉教の時が来ても、信仰を守り通す。

They nolde encense ne sacrifice right noight ,

But on hir knees they setten hem adoun (395-6)

この様に二人は跪く<sup>ひざまず</sup>という儀式的な身振り<sup>(17)</sup>によって永遠の生を受けるといふ静穏で確固たる覚悟を表している。二人はこの世での死を恐れることもなく、つつましやかな心と固い信仰 (397) をもって、偶像の前で首をはねられ、魂は「恩寵の王」(The King of grace) (399) のもとへと昇天する。

聖女セシリアの教え導きによってキリスト教に改宗したヴァレリアンとティブルスは神の恩寵を受け、自らの死によって、より多くの罪と苦難に縛られた人間の救済の道を示したわけである。

#### IV

マクシムス、その他の人々の改宗についてはどうであろうか。長官アルマキウス付の役人マクシムスは、ヴァレリアンとティブルスの2人の聖人 (seintes) (370) を捕え、連れ去る時に「憐れみ」の涙を流す。“Hymself he weep for pitee that he hadde.”<sup>(18)</sup> (371) 更に彼は、この聖人たちの「教え」 (loore) (372) を聞くと、死刑執行人たちの許しを得て、彼らを彼の家に連れ帰る。この聖人たちは、「教え」 (prechyng) (375) を説いて、死刑執行人たちやマクシムスや彼の部下たちから誤った信仰 (The false feith) (378) を取り去り、神だけ (God allone) (378) を信じさせる。この様に敵方のマクシムスたちは、聖人たちの「教え」という真の力ある神にもとづく「言葉」によってキリスト教に改宗する。

次いでセシリアは、司祭たち (preestes) (380) を伴い来て、マクシムスら全員に洗礼を施す (cristned) (380)。それからマクシムスは、偶像に犠牲を捧げることも香をたくこともかたくなに拒んだヴァレリアンとティブルスの2人が偶像の前で首をはねられ、2人の魂が昇天するのを見ると、

2度目の憐れみの涙を流す。

This Maximus, that saugh this thyng bityde,  
With pitous teeris tolde it anonright,<sup>(19)</sup> (400—1)

マクシムスは、2人の魂が明るく輝く天使たちと共に昇天するのを見たと言語って、多くの人々を「言葉」で改宗させる(404)。

そこでアルマキウスは、マクシムスを鉛の鞭で打たせて、命を奪う。聖女セシリアはマクシムスの亡骸をヴァレリアンとティブルスの2人の聖人と並べて墓地に埋葬する。アルマキウスは偶像に対してセシリアに犠牲を捧げさせ、香をたかせるために、彼の前に、役人たち (ministres) (411) に命じて彼女を連れて来させる。だが彼女の賢明な「教え」(Cf. the seintes loore, 372) によって役人たちは改宗する。

But they, converted at hir wise loore,  
Wepten ful soore, and yaven ful credence  
Unto hire word, and cryden moore and moore,<sup>(20)</sup> (414—6)

役人たちは、痛恨の悔悟の涙<sup>(21)</sup>を流し、彼女の言葉(416)を深く信じ、繰り返し次の様に叫ぶ。

“Crist, Goddes Sone, withouten difference,  
Is verry God — this is al oure sentence —  
That hath so good a servant hym to serve.  
This with o voys we trowen, thogh we sterve !” (417—20)

アルマキウスの役人たちは、神の子キリストこそが神であり、全員一致で、強く明白に「信仰告白」をする。

聖人ヴァレリアンとティブルスは、死刑執行人たちやマクシムスと彼の部下たちを「言葉」で説き、改宗させたわけであるが、改宗したマクシムスは、同じく「言葉」でもって多くの人を改宗させ、そしてセシリアは、

アルマキウスの役人たちを「言葉」でもって改宗させたわけである。この様にセシリアの教え導きによって、キリスト教の信仰は広がりゆく。

## V

語り手SNは、前口上において聖女セシリアの「聖人伝」<sup>(22)</sup> (legende) (25) に従って「翻訳」(translacioun) (25) における真面目な勤勉 (my feithful bisynesse) (24) を果たすと決意表明する。また聖母マリアへの祈願において、聴衆 (読者) に対して次の様に言う。

Yet preye I yow that reden that I write,  
Foryeve me that I do no diligence.  
This ilke storie subtilly to endite,  
For bothe have I the wordes and sentence  
of hym that at the seintes reverence.  
The storie wroot, and folwen hire legende,  
and pray yow that ye wole my werk amende. (78—84)

語り手SNは、セシリアへの信仰からセシリア伝を書いた人の言葉と意味を知っているし、聖人伝に従うがゆえに、巧みに (subtilly) (80) 自分の話を書くのに勤勉ではないことを許してほしい (チャーサーの「謙遜のトポス」である)、そしてこの話を訂正 (amende) (84) してほしいと聴衆 (読者) に願う (中世の作者が訂正を求めることはよくあることである)。

語り手SNが巧みに書けないと断るのは、語り手が原典をもとに忠実な翻訳をめざしているがためであり、聖人の生と死の話という「聖人伝」の枠を越えることはせず、従って技をふるえないことを意味している。しかし「謙遜のトポス」であるからには、実は巧みに書けないどころか、逆にチャーサーは巧みに書こうとしていると考えられる。それは聴衆 (読者) に間違いの訂正を願うという一つの型の提示によって、意図的に原典に忠実でない部分もあるという含みを実はチャーサーが持たせていると考えられる

ことから言える。聖人伝作者 (hagiographer) の第一の関心が人々の教化 (edification)<sup>(23)</sup> にあったとしても、聖人伝としての *SNT* が単なる原典の「翻訳」ではないのである。いわばチョーサー版の「セシリア伝」である。そしてチョーサーの典拠とする原典に対するチョーサーによるわずかな改変及び付加が、*SNT*におけるチョーサーの意図を考える上で、実は重要な意味を持っている。

そしてその改変、付加は、長官アルマキウスと聖女セシリアの問答（尋問の場面）において、特に重要である。それはアルマキウスの「愚かさ」とセシリアの「賢明さ」の対比を浮き彫りにする結果になり、*SNT*の意味を考察する上で重要な点となるからである。

アルマキウスとセシリアの関係は、*SNT*においては、最もよく、キリスト教における聖なるものと異教の信仰（偶像崇拜）との違いを明らかにしている。長官アルマキウスの聖女セシリアに対する尋問を通して、なぜ彼は改宗しなかったかを次に考察する。

アルマキウスは、偶像のもとにセシリアを呼び出させるために彼女のもとに送った役人たちまでもが、彼女の教えを聞いて、キリスト教に改宗したと知ると、彼女がいかなる人物なのかを探るため自ら尋問する。1.423から1.511にわたる尋問においてこの二人の間で次の様な8つの問答が交わされる。次に8つの問答を順次検討していこう。

(1) 第1の問答について。アルマキウスはセシリアがいかなる女かと問う。それに対し彼女は生まれながらの高貴な女 (a gentil womman born) (425) (Cf.121) であると答える。

(2) 第2の問答について。アルマキウスはセシリアの宗教（キリスト教）(religioun) (427) と信仰 (beleeve) (427) について尋ねる。それに対して彼女は嘲笑して答える。

“Ye han bigonne youre questioun *folily*,”

Quod she, “that wolden two answeres conclude

In o demande; ye axed *lewedly*.” (428–30) (Italics mine)

ラテン語の原典 *Passio* の当該箇所は、

Interrogatio tua *stultum* sumit initium: quæ duas responsiones una putat inquisitione concludi. (682) (Your interrogation begins *foolishly*, which expects two replies to be concluded from one question.)<sup>(24)</sup>

(Italics mine)

で、チャーサーはセシリアの答えにおいて、“*stultum*” の意味の語を2度使う (“*folily*” = *foolishly*; “*lewedly*” = *ignorantly*) ことによって、アルマキウスの愚かさというセシリアの考えを強調する<sup>(25)</sup>。宗教と信仰とは同じものであることを知らないアルマキウスの無知、愚かさの指摘である。

(3) 第3の問答は次の様なものである。

“*Of whennes comth thyn answeyng so rude ?*”

“*Of whennes ?*” quod she, whan that she was freyned,

“*Of conscience and of good feith unfeyned.*” (432–4) (Italics mine)

*Passio* の当該箇所は、

Almachius dixit: *Vnde tibi tanta præsumptio respondendi ?* Cæcilia dixit: *De conscientia bona: et fide non ficta.* (682) (*Where does such great presumption of your answer come from ? From a good conscience and a faith not false.*) (Italics mine)

で、*SNT*の方は、セシリアの答え方の方が無知だ (*rude*) と考えるアルマキウスが「どこから」(*of whennes ?*) と問うと、セシリアはその言葉を繰り返すことによって、「良心と偽りのない信仰から」(434) と自らの答えの確信に満ちた捌り所を毅然と答えている。

(4) 第4の問答について。第3の問答におけるセシリアの毅然たる答え方にアルマキウスは自らの地上の権力による威嚇を持ち出すしかない。セ

シリアは彼の権力 (power) (436) を気にしないのかと問われると、彼女は彼の権力 (myght) (437) など少しも恐れるに足りないと、自らの死を恐れずに権力者に大胆に刃向かう。セシリアはあらゆるこの世の人間の権力は、空気で一杯ふくらんだ膀胱みたいなもので、ふくらんでも針の尖ではじけて、その誇りはくじかれてしまうものであると言う。現世の地上権力を絶大なものとするアルマキウスと、異教徒たる彼の権力は真の力ではなく、みかけは誇れるものであっても実体は無意味なものであることを知るセシリアとの天と地の対立的な姿をここに見る。

(5) 第5の問答について。アルマキウスはセシリアの方こそ誤って (ful wrongfully) (442) いると言り返す。彼は君主たち (444) が、いかなるキリスト教徒も信仰を棄てなければ刑罰を受けるが、もし棄てれば、罰を免がれることをいかに命令し、法律を制定したかを知らないのかと尋ねる。アルマキウスはあくまでも現世の異教の権力者の視点でしかものをとらえられない。それに対してセシリアは、キリスト教の視点から現世の異教の為政者たちの誤ちを指弾する。セシリアはアルマキウスや君主たちの方こそが間違っている (erren) (449) こと、アルマキウスが狂った裁き (a wood sentence) (450) でセシリアたちを有罪としたこと、そしてそのことが偽りであることを申し立て、その理由として、彼女たちにとがのないことをよく知っていながら、彼女たちがキリストを崇めていて、キリスト教徒であると知られているがゆえに彼女たちを咎めていると非難する。そこにはキリスト教徒であることは徳高き (vertuous) (457) ことであることの強い自負がある。

(6) 第6の問答について。第5の問答におけるセシリアの答えに対して、アルマキウスは偶像に犠牲を捧げるか、キリスト教の信仰を棄てるかの二者択一を強く迫る。彼はセシリアの受け答え、申し立てに対して言葉でもって、いかなる方法によっても何ら答えることができず、結局地上の権力者としての威嚇しかできないわけである。アルマキウスの威嚇に対して、神に祝福された聖女セシリア (the hooly blisful faire mayde) (461) は笑い



出す (Gan for to laughe)<sup>(26)</sup> (462)。これまで肉体的に静穏な身振り (290) しか見せなかったセシリアのこの「笑い」の激しい身振りは、どの様な意味を持っているのであろうか。Passioでは

Tunc *surridens* beata Cæcilia dixit (683)  
(Then *smiling*, blessed Cecilia said) (Italics mine)

とあって、“laugh”ではなく“smile”の意味の言葉を使っている。この「笑う」(laughe)という言葉は、アルマキウスとセシリアとの最後の第8の問答の結末における1.506でもう1度使われる。そこではアルマキウスの愚かさ (folye) に対する人々の笑いに言及している。

“It is a shame that the peple shal  
So *scorne* thee and *laughe* at thy *folye*, (505–6) (Italics mine)

ll.505–6に該当するPassioの箇所は、

Nefas est enim: ut totus populus de te *risum* habeat. (684) (It is a shame that all the people should *laugh* at you.) (Italics mine)

とあり、チャーサーは1.506において“folye”と“scorne”を付加していることがわかる。従って1.462においてチャーサーが、“smile”を使わず“laughe”を使う意図は、「笑う」(laughe) ことによってアルマキウスの「愚かさ」(folye) を「嘲笑する」(scorne) ことにあることは明らかである。笑うセシリアは、激昂したアルマキウスを嘲りこう言う。

“O juge, confus in thy nycetee,  
Woltow that I reneye innocence,  
To make me a wikked wight ? ” quod shee.  
“Lo, he dissymuleth heere in audience;  
He stareth, and woodeth in his advertence ! ” (463–7)

“confus in thy nycetee” (463) は、*Passio*では “necessitate confusum” (683) (confused by necessity) とあり、チャーサーは “necessite” とするところを “nycetee” (=foolishness) と変えることにより、アルマキウスの愚かさを強調する<sup>(27)</sup>。アルマキウスは眼を見据え、心中怒り狂う (He stareth, and woodeth in his advertence)<sup>(28)</sup> (467) という激しい身振りを見せる。セシリアの肉体的な静穏が魂の美しさを表しているのに対して、それとは対照的にアルマキウスの激しい身振りは邪悪な姿を如実に見せている<sup>(29)</sup>。

(7) 第7の問答について。セシリアの第6の答えに対して、あくまでも地上の権力者としての立場しか知らないアルマキウスからは、セシリアは不幸なやつ (Unsely wrecche) (468) としか見えず、自らの権力 (469) を誇示し、力ある君主 (oure myghty princes) (470) が彼に与えた生殺与奪の権力 (bothe power and auctoritee) (471) を握っていると自負するアルマキウスは、セシリアが死をも恐れず、彼にとって不遜に (proudly)<sup>(30)</sup> (473) しか見えない仕方で抗弁する理由が理解できない。それに対しセシリアは反論する。アルマキウスから見れば、彼女は傲慢に (proudly) (475) 物を言っているようにみえるが、反対にセシリアにすれば信仰にもとづき毅然と (stedfastly) (474) 言っているまでのこと。キリスト教徒にとって傲慢 (pride) は、七大罪源の第一のものであり、セシリアも傲慢の悪徳 (vice of pryde) (476) を嫌悪している。セシリアは、アルマキウスが大きな偽り (a ful gret lesyng) (479) をなしたこと、つまりアルマキウスが確かに「死の代理人」(Ministre<sup>(31)</sup> of death) (485) として、この世の生命を奪うことはできても、どの他の力 (power) (483) も許し (権力) (leve) (483) も持っていないで、現世での生殺与奪の権以上の力はなく、彼の力は限られたもの (thy power is ful naked) (486) であることを毅然と宣告しているのである。

次にアルマキウスの愚かさを強調するために、チャーサーは人称代名詞 “thou” と “ye” の使い分けをしていることを指摘したい。W.W.Skeatはこの2つの違いを次の様に説明している。

*Thou* is the language of a lord to a servant, of an equal to an equal, and expresses also companionship, love, permission, defiance, scorn, threatening: while *ye* is the language of a servant to a lord, and of compliment, and further expresses honour, submission, or entreaty.<sup>(32)</sup>

セシリアはアルマキウスとの問答の始まりにおいては、アルマキウスの愚かさを指摘している時（428, 430）でも“*ye*”を使っている（455まで）。ところがセシリアの「笑い」（462）を機に“*ye*”ではなく“*thou*”を問答の終わりまでアルマキウスに対し使い始める（477, 509）。一方アルマキウスは、問答の間中一貫してセシリアに対し“*thou*”を使う。セシリアが“*thou*”と言う時は、アルマキウスに対する反抗、挑戦（*defiance*）や嘲り、嘲笑（*scorn*）の気持ちを含んでいるのである。

（8）最後の第8の問答について。第7の問答におけるセシリアの答えに対して、セシリアの態度に立腹するアルマキウスは、彼女にその尊大さ（*booldnesse*）<sup>(33)</sup>（487）（実はセシリアから見れば彼の方こそが尊大なのであるが）を捨て、犠牲を捧げて行けと、つまり異教に改宗せよと命じる。彼が言うには、彼は道德家（*a philosopre*）<sup>(34)</sup>（490）としてなら彼に対するいかなる侮辱（489）もがまんでできるが、彼らの神々に対するいかなる侮辱（491）はがまんならぬと、彼に動じるどころか彼にすれば尊大な態度、物言いのセシリアに対し、彼女を論破するのに異教の神々の權威を持ち出す以外に方法はない。ところがアルマキウスの威嚇に対してセシリアは毅然と彼の愚かさを繰り返し指弾する。

Cecile answerde, “O nyce creature !”

Thou seydest no word syn thou spak to me

That I ne knew therwith thy *nycetee*

And that thou were in every maner wise

A *lewed officer* and a *veyn justise*. (493—7) (*Italics mine*)

*Passio*における11.493－97に対する当該箇所は次の様である。

ex quo os aperuisti: non fuit sermo quem non probauerim iniustum  
*stultum* et uanum (684) (From the time you opened your mouth there  
has not been a statement which I have not proved unjust, *stupid*, and  
vain.) (Italics mine)

チャーサーは明らかにアルマキウスについて “nyce” (=foolish) (493),  
“nycetee” (=foolishness) (495), そして “lewed” (=ignorant) (497) と  
彼の愚かさ、無知を表す言葉を原典より2度多く使う。更に*Passio*には見ら  
れない、「無知な役人」(a lewed officer) (497), 「愚かな裁判官」(a veyn  
justise) (497) という表現からもチャーサーの力点の置き所がわかる。

アルマキウスの愚かさを具体的に言うと、アルマキウスは全く盲目で  
(blynd)(499),彼がその上に手を置けばすぐわかる、誰が見ても石(stoon)<sup>(35)</sup>  
(500) とわかるものを神(a god) (501) と呼ぶことである。勿論ここで  
“blynd” というのは肉体的な盲目ではなく、霊的な盲目を意味し、偶像崇拜  
という神を視ることができないアルマキウスの愚かさ(folye) (506), キリ  
スト教の天上的な真の価値に対する無知のことであり、セシリアはそれを  
挑戦的に駁論する。

チャーサーは*SNT*において1.85からおよそ1.345までは*Legenda aurea*を、  
そして後半部は*Passio*を典拠としていると考えられているが、*Passio*は本文  
の11.489－97, 11.505－11に対する当該箇所を含むが、*Legenda aurea*にはそ  
れがない。そして、これら2ヶ所のチャーサーの付加部分については先に  
触れた様にアルマキウスの愚かさに力点が置かれている。つまりチャーサー  
の典拠に対する態度からも*SNT*に対するチャーサーの意図が伺える。

これまでアルマキウスとセシリア問答(尋問)を考察してきたわけであ  
るが、そこからわかることは、彼女が、真の力ある正しい裁判官(The  
rightful juge) (389) キリストから力を授けられたいわば神の代理人であり、  
他方アルマキウスは、力ある君主たち(470) から生殺与奪の権力を授けら

れた「死の代理人」であるが、現世の限定的な力しか持たない愚かな裁判官 (a veyn justise) (497) にすぎないことを、セシリアは、明らかにしていることである。

従って聖女セシリアの「言葉」になんら耳を傾けないアルマキウスは「恩寵の王」(the Kyng of grace) (399) とも「真理」(238, 259, 267, 291) とも無縁の存在なのである。

## VI

セシリアに対する尋問において激怒したアルマキウスは、セシリアを彼女の家に連れて行き、赤い炎の風呂で焼き殺すように命じる。しかし、昼夜を問わない風呂の火と熱にも関わらず、彼女は冷たいまま座り、なんの苦痛も感じず、一滴の汗も流さない (521)。そこで邪悪な心の (with ful wikke entente) (524) アルマキウスは、配下の者に風呂で彼女を殺すよう命じる。死刑執行人が彼女の首を3度打つが、打ち落とせず、法律により4度打つことはできないので、セシリアを半殺しのままうち捨てておく。セシリアは3日間苦しみ (torment) (537) のうちに生き延びるが、その間も彼女がこれまで導いてきた (fostred) (539) (セシリア自身信仰のうちに導かれる [122]) 人々に信仰 (feith) (538) を教え (teche) (538), 説教 (preche) (539) を止めず、自分の私財や物品を与える (これは天に宝を積むことを意味する [『マテオによる聖福音書』第19章21節])。そして、彼女は信徒たちを教皇ウルバンに託し、最後にウルバンにこう打ち明ける。これら信徒たち (soules) (545) を彼に託す前に3日間だけの猶予と、彼女の家を永遠に「教会」(a cherche) (546) とすることを神 (hevene kyng) (542) に願ったと。セシリアはアルマキウスの単なる無力な犠牲者ではなく、自らの意志で自らの死を迎えたわけである。聖女セシリアにとって、彼女が育み、教え、導いてきた信徒たちはいわば彼女の霊的な子供と言えるもので、彼らに私物を与え、彼女の家を彼らのための教会とすることは、彼女が自らの勤めとして地上に「教会」＝「キリスト教徒の共同体」を作

り上げることを意味する。

セシリアの殉教後、聖ウルバンは、助祭たち (deknes) (547) と共にセシリアの亡骸を他の聖者たちの間に埋葬する。そして彼女の死後、「聖女セシリア教会」 (the chirche of Seint Cecilie) (550) と呼ばれるセシリアの家を聖別する (halwed) (551)。「聖女セシリア教会」のもとには死後も多くの人々が参集するのである。

語り手 S N は、SNT の語り始めにセシリアをこう紹介している。

This mayden bright Cecilie, as hir lif seith,  
Was comen of Romayns and of noble kynde,  
And from hir cradel up fostred in the feith  
Of Crist, and bar his gospel in hir mynde.  
She nevere cessed, as I writen fynde,  
Of hir preyere and God to love and drede,  
Bisekyng hym to kepe hir maydenhede. (120—6)

キリストの信仰のうちに教導され、キリスト教教義を心に抱き、絶えず神に祈り、神を愛し畏れる乙女 (mayden bright) (120) セシリアは、神に彼女の「純潔」 (maydenhede) (126) の守護をひたすら祈願する。聖アンブローズによれば、処女性をもつ者には、神と人間を結びつける「媒介者」としての役割が割り当てられている<sup>(36)</sup> と言う。天と地の「媒介者」としての乙女セシリアは、殉教死に至るまで信仰において堅忍不拔の姿を見せ、死後の彼女の働きは終わることはないのである。

## VII

長官アルマキウスの尋問を通して聖女セシリアは、異教徒アルマキウスの愚かさ、靈的に盲目な姿を露にすると同時に、自らの信仰に対する活動性、靈的な視覚を持つ姿を見せる。キリスト教への改宗者にとっては、異教徒が見ることのできないもの、つまり聖性は隠されてはいないし (316—

7), 夢 (dreem) (261) でもなく, ただ「真理」(trouthe) (267) なのである。そして, そこにチョーサーの改変, 付加により原典とは違ったチョーサーによる語りの面白さを我々は見る。

殉教の死によって永遠の生命を受けたセシリアの活動の姿を通して, チョーサーは, 罪と苦しみに縛られた (347) 人間のキリスト教への改宗による「霊の救済」(salvacioun) (Cf. *The Retraction*, X 1090) の道, つまり「真理」(trouthe) を聴衆 (読者) に提示しているのである。

### 注

- (1) *SNT*の引用はすべてLarry D. Benson (ed.), *The Riverside Chaucer*, 3rd ed. (Boston: Houghton Mifflin, 1987) に依る。本文中括弧内の数字は行数を表す。また邦訳聖書の引用は『聖書』(東京: ドン・ボスコ社, 1976) に依る。
- (2) Helen Cooper, *Oxford Guide to Chaucer: The Canterbury Tales* (Oxford: Clarendon Press, 1989), p.358. Cf. *M.E.D.*はc1380年とする。
- (3) Robert G. Bensonはその著 *Medieval Body Language: A Study of the Use of Gesture in Chaucer's Poetry* (Anglistica vol. XXI; Copenhagen: Rosenkilde and Bagger, 1980) において, *SNT*における11ヶ所のgesture (身振り) を指摘しており, ll.189-90もそのうちの2ヶ所である (l.189, ceremonial/expressive; l.190, expressive) (p.148)。

R.G.Bensonは“gesture”を次の様に定義する: “any expressive bodily movement, manner, bearing, posture, facial expression, or sound specified in the text” (*Ibid.*, p.10) そして“gesture”を3つに分類する: (1) expressive gestures, which translate emotions into behavior (2) demonstrative gestures, which are intentional, theatrical movements or poses (3) ceremonial gestures (*Ibid.*, p.10)

池上俊一は中世における「身振り」についてこう言う。「中世全般にわたって, 身振りを評価する基礎となる一種の二元論があった。すなわち人間の内面と外面の二元論であり, 身振りは体の隠された現実を表現する, いいかえれば, それは魂, あるいは内的人格を表現し, その状態を外部に, つまり身体の動きとして表現するという考え方である。」(池上俊一『歴史としての身体—ヨーロッパ中世の深層を読む—』[東京: 柏書房, 1992], 10頁)

- (4) Cf. 「優れた宗教者の資質・条件として, 滂沱と涙を流すことがさらに要求されるようになる。」(池上俊一, 165頁)
- (5) *SNT*の原典について, 本文ll.1-28はJean de Vignay (1282/85-1348) に依る *Legenda aurea* (『黄金伝説』) のフランス語の翻訳, ll.29-84は主にDanteに依

る *Paradiso* (33. 1-39), 1.85からおよそ1.345はJacobus de Voragineに依る *Legenda aurea*, そして *SNT*の後半部はMombritius編纂の *Passio S. Caeciliae* (『聖女セシリアの受難』) に依ると考えられている (L.D.Benson, p.942) Cf. W.F.Bryan and Germaine Dempster (eds.), *Sources and Analogues of Chaucer's Canterbury Tales* (Atlantic Highlands, N.J.: Humanities Press, 1941), pp.664-684. *Passio*のラテン語原典からの本文中の引用はすべてこれに依る。引用文の後の括弧内の数字は頁数を表す。なお『黄金伝説』における聖女セシリアの邦訳はヤコブス・デ・ウォラギネ 前田・山中訳『黄金伝説』第4巻 (京都: 人文書院, 1987), 282-296頁を参照。

- (6) "as busy as a Bee" (Bartlett Jere Whiting, *Proverbs, Sentences, and Proverbial Phrases From English Writings Mainly Before 1500* [Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press, 1968], p.31) (c1380 VIII 195初出)
- (7) 甚野尚志『穩諭のなかの中世』(東京: 弘文堂, 平成4年), 42頁。
- (8) expressive (R.G.Benson, p.149)
- (9) ceremonial (*Ibid.*, p.149) Cf. 儀式化した身振りについて, 「これらの儀式は, 特定の身分や役職と不可分で, その身分・役職を, 区別されるべき外部に対して誇示し, さらに, 自分たち内部での連帯・凝集性をたかめるための象徴化作用をもっていた。」(池上俊一, 15頁)
- (10) *SNT*においてヴァレリアンのみならず他の改宗者たちも突然改宗し, 心の内的発展は見られない。これは中世の聖人伝に共通のことであるが, その理由をグレーヴィチは次の様に説明する。「中世において最も普及し最も中世的であったジャンルである伝記-聖者伝-の中では, 通常, 人が聖性へと至る過程は描かれていない。人は突如として生まれ変わり, 準備もなしに一気にある一つの状態(罪深き状態)から他の状態へと移るか, あるいは人の聖性はあらかじめ与えられていて(その人間はすでに聖人として生まれて), その聖性が徐々に現われてくるだけのことなのである。」(アーロン・グレーヴィチ 川端・栗原訳『中世文化のカテゴリー』[東京: 岩波書店, 1992], 191-2頁) Cf. 上掲書, 440-41頁。
- (11) 「芳香」を表す言葉は, *SNT*において繰り返し7回現れる (soote savour [91, 229, 247]; savour [243, 250]; sweete smel [251]; smelling [279])。 *SNT*における聖性の芳香と *The Canon's Yeoman's Tale* (VIII 885-90) における悪臭との対比に注目。 Cf. 芳香のキリストについては, 池上俊一 (238-9頁) を参照。
- (12) 芳香の花冠について語る聖アンブロウズは *SNT*にふさわしい人物である。というのは彼は, 「天上の香り」, 「天上の美味」, 「天使たちの食物」, 「天上の蜜をおさめる蜂の巣」と呼ばれているからである (ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説』第2巻 [京都: 人文書院, 1984], 52頁)。
- (13) Cf. R.G.Benson, pp.45, 46, 149. 「抑制された秩序だった身振りはその魂の美しさや, 積まれた美德の数々を表現するが, 反対に, 混乱し無秩序で, 過度であ



ったり、ひきつったり、だらしなかつたりする身振りは、秘められた虚栄や罪・悪徳を開示する。」(池上俊一, 10-11頁)

- (14) *M.E.D.*, remissioun n. 2.(a) (初出c1230, [c1380] この箇所引例)
- (15) Cf. 『ティモテオへの後の手紙』第4章6-8節
- (16) Cf. 『ローマ人への手紙』第13章12節
- (17) R.G.Benson, p.149.
- (18) expressive (*Ibid.*, p.149)
- (19) expressive (*Ibid.*, p.149)
- (20) expressive (*Ibid.*, p.149)
- (21) 贖罪・悔悟の涙は、「罪人が重く背負ったその罪を洗い流し、悪魔の接近を阻む効能を持っている。」(池上俊一, 164頁)
- (22) チョーサーは複数の聖人伝を書いたと考えられるが、「セシリア伝」しか残っていない。Cf. the Retraction, X 1088.
- (23) Paul M.Clogan, "The Figural Style and Meaning of The Second Nun's Prologue and Tale," *Medievalia et Humanistica*, 3 (1972), 216.
- (24) Paul E.Beichner, "Confrontation, Contempt of Court, and Chaucer's Cecilia," *The Chaucer Review*, 8 (1973), 199. 以下 *Passio* の英訳はBeichner訳 (pp.199-202) に依る。
- (25) *Ibid.*, 202.
- (26) expressive / demonstrative (R.G.Benson, p.149) R.G.Bensonはセシリアの笑いについてこう言う。"Far from being an hysterical reaction, her laughter is simply expressive of the perspective of perfect love which allows her to laugh at the foolishness of Almachius' alternatives." (*Ibid.*, p.46)
- (27) P.E.Beichner, p.203.
- (28) expressive (R.G.Benson, p.149)
- (29) *Ibid.*, p.45. Cf. 注16.
- (30) *M.E.D.*, proudli adv. 1. (a) (初出 [1340], [c1380] この箇所引例)
- (31) *M.E.D.*, minister n. 4 (初出 [c1300], [c1380] この箇所引例)
- (32) Walter W.Skeat (ed.), *The Complete Works of Geoffrey Chaucer*, 2nd ed., Vol. V (Oxford: The Clarendon Press, 1972), p.175, note to l.1677.
- (33) *M.E.D.*, boldness n.(d) (初出 [c1380] この箇所引例)
- (34) *M.E.D.*, philosopre n.(d) (初出 [c1380] この箇所引例)
- (35) Cf. *SNT*と *The Canon's Yeoman's Tale* とは密接な関係にある。それは前者の石の偶像と後者の「哲学者の石」の対比などから言える (L.D.Benson, p.946, note to l.490)。柴田竹夫『Chaucerの *Canon's Yeoman's Tale* - "ignotum per ignocius" をめぐって-』『主流』第46号 (1985), 10-12頁。
- (36) 甚野尚志, 42頁。